基調講演Ⅱ「戦国の山城を掘る－発掘調査で明らかになった山城の実像－」

滋賀県立大学教授　　中井　　均

では，改めまして中井と申します。よろしくお願いします。

私は話をして，最後に，少し発掘調査のスライドを見てもらおうと思ってます。レジメにしたがってお話をさせていただきたいのですが，余りしゃべりがレジメどおりにいかないかと思いますが，その点は御容赦願いたいと思います。

まず，先ほどの小都さんのお話ですが，これはもう広島県というよりも全国的な要素というふうに考えてもいいかと思います。全国的なレベルでの発掘調査の成果も同じような状況になるのではないかなと思っています。

私がそれにつけ加えてお話を申し上げたいのは，まず「お城って一体何なのか」ということです。城は戦，あるいは合戦に使われたというイメージがあると思います。しかし，実際発掘調査でお城の実態が分かった一番の成果だと思っているのは，城はほとんど戦に使われていないということなんですね。戦に使われてないという言い方は語弊があるかもしれません。つまり，落城しなかったというか，実は燃えていないんですね。ほとんどのお城で，焼土は検出されません。それから遺物が出た場合，遺物は二次焼成といいまして，もし焼けたりすると，磁器ですと釉がもう一度溶けたりしますから，二次焼成が加わるわけですが，ほとんど火を受けた痕跡がないわけです。

恐らく，今は開発に伴う発掘調査というものが少なくなったので，年間100か所も，発掘調査はされていないかもしれないのですが，昔は年間100か所ぐらい城の発掘調査をやっていたわけですけれども，そのうち，焼けた土が出るとか，それから二次焼

成を受けた遺物が出るというのは，１か所あるかないかぐらいなんですね。ほとんどの城は燃えていないということです。

有名なところでは，滋賀県に小谷城という城があります。浅井氏三代50年の居城なんですが，最後は織田信長に攻められて落城します。有名なお市とその娘の三姉妹が落城の前に織田信長に引き取られるわけですが，長政はそこで自害をします。

皆さん，どんなイメージがありますでしょうか。

秀吉が先陣を切って，小谷城に攻め上り，小谷城は落城するわけですね。落城のイメージってどんなイメージがありますか。住んでいた御殿が焼かれて，例えば麓から見ると山の上の城が燃えているようなイメージが頭の中に浮かぶのではないでしょうか。

小谷城では，昭和45年から発掘調査を始めているのですが，全く焼土が出ないんですね。市や三姉妹が住んでいたと考えられる大広間というところからは，37,000点に及ぶ遺物が出土しています。つまり，恒常的に生活をしていた痕跡が山の上では見つかっているわけですが，その37,000点の１点たりとも二次焼成を受けた遺物が認められないのです。つまり，信長に攻められても焼かれてないんです。私たちは，どうもお城に関してはイメージ論が先行していたのではないかと思うのですが，それを発掘調査という考古学的な調査によって，初めてメスが入れられたのではないかと思っています。

今日は，そういうお話が少しでもできればいいなと思っています。まず初めに，２つのお城の発掘調査の成果を少し見ていただきたいと思います。

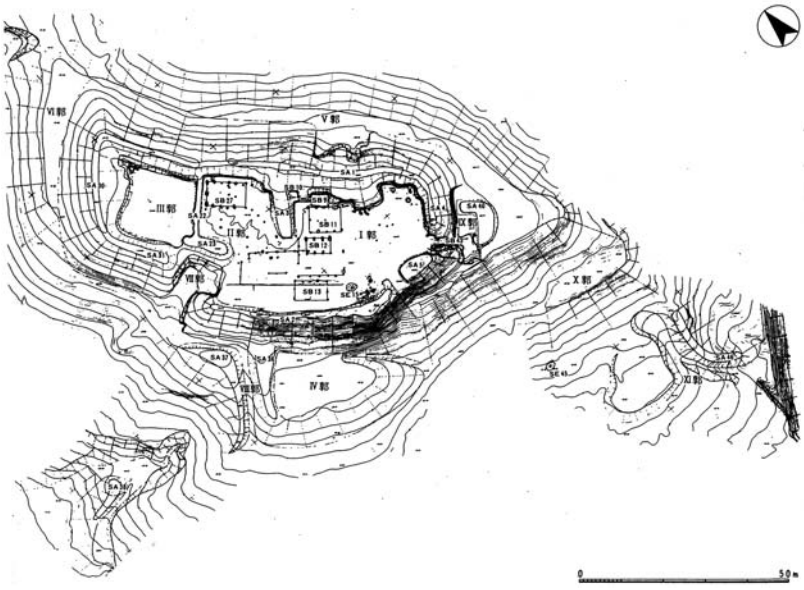
第１図をご覧ください。

これは私が，発掘調査をしたお城の中で最も興味を持ったお城です。１つは，広島県にあります恵下城です。これは先ほどの小都さんがお話をされました恵下山城とは違う恵下城なんですけれども，第１図上です。図の右下に物差しがありますから，城の大きさが大体分かっていただけると思います。ほぼ東西100ｍ，南北が恐らく70～

80ｍの大きさです。極めて小規模な山城です。その山城の頂部に１Ｋと書いてあります。郭の１ということですね。１Ｋと書いてあるところの上に溝がずっと巡らされているのが，お分かりいただけるでしょうか。この溝は，布掘の柵列の跡です。つまり，主郭に柵が廻っていたわけです。この柵が大変おもしろいのは，１Ｋというところでなぜか凸型に突出しているのです。恐らく横矢をかけるためなのですね。横矢というのは，皆さんが城を攻めてきますと，私が城内から矢を放ちますが，これは一方向にしか射ることができませんが，土塀や柵列を直角に折り曲げることによって，側面からも射ることができるわけです。つまり，これは発掘調査をするまで全く分からなかったのですが，柵を突出させることによって横矢がかけられるということが，まず分かったということですね。

それから建物を見ていただきますと，１Ｋの中に線を引いている建物が３棟あります。いずれも１間×２間とか，１間×３間，あるいは２間×２間という大変小さな建物です。恐らく居住するようなものではないということです。倉庫です。

それから，私がおもしろいなと思ったのは，今度は郭１の南の方に



第１図〔上〕　恵下城跡調査区及び遺構配置図（アミ目：礫群）
〔下〕　山田城跡郭・主要遺構配置図

スクリーントーンを貼っているところがありますが，ここは礫がいっぱい集まっていたところです。ひょっとすると私は，これは石礫（いしつぶて），つまり投げるための石があらかじめ準備されていたものではないかなと考えています。小さな城ではありますが，柵によって横矢がかけられる。あるいは建物はきわめて小規模な倉庫である。そして，投石のための礫が集められていた可能性があるというような情報を，実は持っているわけですね。

第１図下をご覧ください。この図は三重県の山田城というお城です。ほぼ全域が発掘調査されています。こちらも右下の物差しを見ていただくと分かるのですが，東西約180ｍ，南北約100ｍの小規模な山城なんですね。ここで，非常に見にくくて申しわけないんですが，中心の郭は右からⅠ郭，Ⅱ郭，Ⅲ郭というローマ数字が書いてありますが，ちょうどⅡ郭の左斜め下にⅦ郭というところがあると思います。このⅦ郭は，実は郭ではなくて枡形虎口という城門のあったところです。私たちは枡形虎口という，直進させずに一旦虎口の中に入ると，右折れするか左折れをするという構造というのは，16世紀の後半，とりわけ織田，豊臣がつくり上げていったと考えがちなのですが，この山田城では出土した遺物が15世紀の後半から16世紀の前半ということで，決して織田・豊臣だけではなくて，在地の武士たちがこういう枡形をつくり上げていった可能性というのが，この山田城からは分かってくるわけです。

あるいは，山田城と恵下城の大きな違いは，山田城では１郭２郭にＳＢ11ですとかＳＢ27といった，居住空間になる建物を持っているということです。

第１図上の恵下城が戦うだけの城であるとするならば，第１図下の山田城は恐らく住まいする，つまり山城が住む空間を持っている城でもあったということが言えると思います。

この２つの調査事例はいずれも1970年代という，非常に古い段階の発掘調査の成果なんですが，今まで余り城館研究では評価されることがなかったと思うんです。それは報告書の中にも横矢がかかるとか，枡形だということが記されていないんです。

1970年代という年代では，考古学で中世の城を研究しようという人もいないですし，それから中世の城自体が考古学の対象になった，まだまだ初めのころなので，なかなか研究と調査自身が乖離していた時代であるということですね。ようやく，近年では城館研究というのは考古学の中の一分野になりましたし，研究も非常に進んでいるわけですが，こうした古い調査をもう一度精査してみると，新しい情報がまだまだ隠されているようです。私は恵下城と山田城は大変おもしろい２事例だろうと思っていまして，最初にお話をさせていただいた次第です。

次に，今日は戦う城と住む城という２つの面から発掘調査された城を見ていきたいと思っています。

城というのは，軍事的な防御施設です。これは動かしがたい本質なんですね。城は戦うためにつくられている。これは当たり前なんです。ところが，よくよく考えてみると，一年間365日城が戦っているかというと，そんなことはないわけです。実際，先ほども言いましたように，焼けていない城のほうが圧倒的に多いのですが，その城で戦争があったのか，なかったのかというと，戦った城のほうが圧倒的に少ないのです。戦った城でも１日で戦が終わっているとか，数日で終わっているわけですね。籠城戦が数か月に及ぶなんていうのは，ほとんどないわけです。わずか１日２日で，決着がついています。それは逆に言いますと，普通の城は365日のうち，364日は普通の生活を城でしていたということなんです。毎日戦うために生活をしていたわけでは，決してないということです。だから，戦う城と住まう城という２つの面で城を見ていかなければいけないのではないかなと思っています。

まず本質論の戦う城というところに注目したのですが，まずお城にとって一番大事な防御施設というのは郭（曲輪），つまり平坦地ですね。山のてっぺんに階段状につくっていく。これは兵の駐屯地になるわけです。

そして，その郭と郭の斜面に切岸という人間が人工的に岸を切って急傾斜地としている。これね，発掘した城へ行って，何が一番すごいかというと切岸を見るのが一番

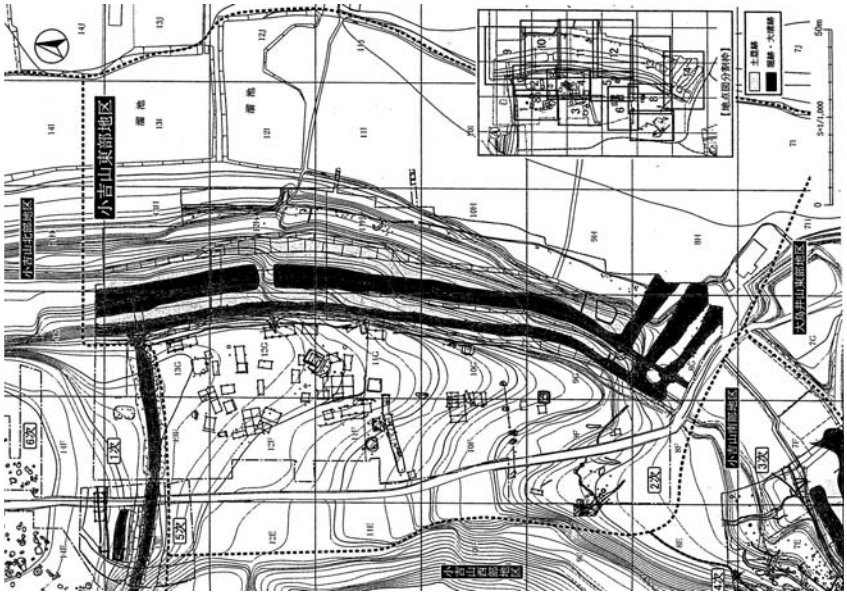
すごいんですね。実際に登ってみようとすると登れないです。二足歩行では無理ですね。四つん這いになって登っていくわけですよ。そうすると上から石を落されたらそれで終わりです。だから切岸というのが，どれだけすごい防御施設かというのは，発掘をするとよく分かります。

それから，堀切ですね。これは遮断線で，敵を寄せつけない遮断線になります。

もう一つは，土塁ですね。これは遮断の壁になるわけです。ただ土塁というのは，よく聞く言葉ではありますが，土塁をめぐらす城というのは，そう多くはありません。基本的には郭，堀切，切岸が一番多いわけです。ここで「じゃあ，いつごろできたのだろうか」「山城っていつごろできたのか」あるいは「何で山城ができたのか」という問題があります。

私は最近，日本の山城の起源を解く鍵として，第２図の大鳥井遺跡という遺跡に注目しています。これは，秋田県の横手市にある遺跡ですが，11世紀の後半の城館遺跡です。恐らく1083年から1087年の後三年合戦にかかわる城の一つではないかと考えられているのですが，この第２図を見ていただきますと，黒く濃く塗りつぶされているのが堀のラインです。山の斜面に二重に横堀をめぐらせています。そして，その横堀はこの図面でいいますと，一番右端で三本に折れ曲がって丘陵の下の方に向かっているというのが分かっていただけると思います。

あるいは，源頼朝が奥州を攻めたときに，奥州軍，つまり奥州藤原氏は阿津賀志山という山から延々数キロにわたって二重堀というものを築いています。



第２図　大鳥井遺跡小吉山東部遺構配置図

この阿津賀志山の二重堀については『吾妻鏡』の中に，畠山重忠が鉱夫を連れて戦に参加したというふうに書いてあります。何で鉱夫を連れて参加したかというと，その阿津賀志山の二重堀に一晩のうちに土橋をつくらせたと書いてあるわけです。つまり，延々とした堀というのは，馬が越えられないわけです。鎌倉武士というのは騎兵です。馬に乗って戦をするというのが基本なんです。当時の日本馬は，アラブ産の馬のように背が高く，たくましいわけでは決してなくて，背の低い小さな馬でありますから，堀が越えられないのです。

この大鳥井遺跡の横堀だとか，阿津賀志山の二重堀といった，馬を越えさせないというものが中世で最初の防御施設になっていくわけです。

そうなると，単純な話です。何で山城が南北朝時代に爆発的に増えるか。反鎌倉方というのは，鎌倉正規軍の騎兵に勝つために馬があがれないような山に城を築いたのだということが分かるわけです。

当然，馬を降りた鎌倉幕府軍たちは，大鎧を着ていますから歩けないわけです。大鎧というのは，騎兵用の鎧ですから歩兵戦には適してないわけです。つまり，山城の出現というのは，騎兵をいかに防ぐかということで，この大鳥井遺跡の横堀から分かるわけです。

あるいは，第３図は吉田住吉山遺跡という兵庫県三木市にある城館遺跡ですが，南北朝時代の城です。よく見ていただきますと，丘陵の一番上に主郭があって，そのちょうど左側の丘陵が続くところに，土塁と横堀が四重に食い違うように複雑に組み合わせているのが分かります。つまり，ここも馬が越えられないような横堀をめぐらせていることが分かっています。建武・暦応年間の丹生山攻めにあらわれる志染軍陣と考えられています。

このように一番初期の山城というのは，横堀が発達するか，あるいは急峻な山につくることによって騎兵を防ぐというのが目的であったということが分かります。

こうした堀は，戦国時代の城にとっては最も重要な防御施設になるわけですが，堀

切の場合，一番最初は薬研堀が圧倒的に多いわけです。断面がＶ字状になる空堀です。堀の幅よりも高さと，それから堀の底をいかに急峻にするか，堀から上がらせないようにしているわけです。

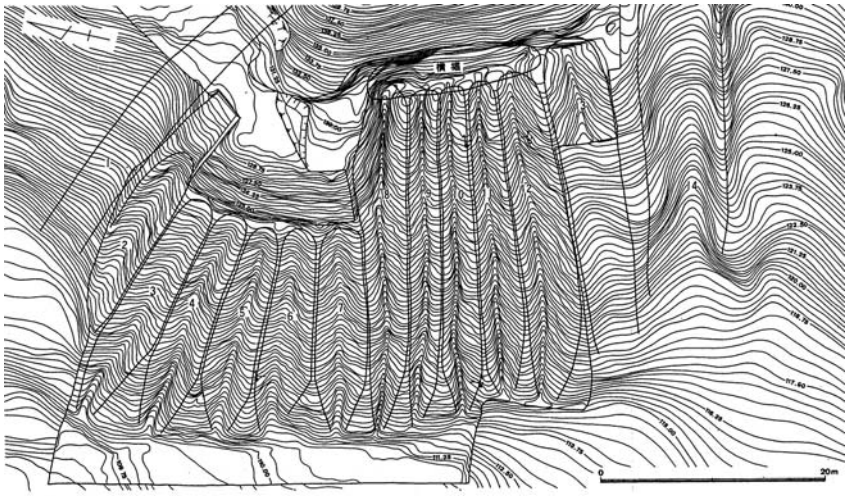
第３図　吉田住吉山遺跡測量図

ところが，鉄砲が日本に入ってきますと，今度は堀の幅を広くします。つまり，射程距離を長くして命中率を低くしようとするわけです。

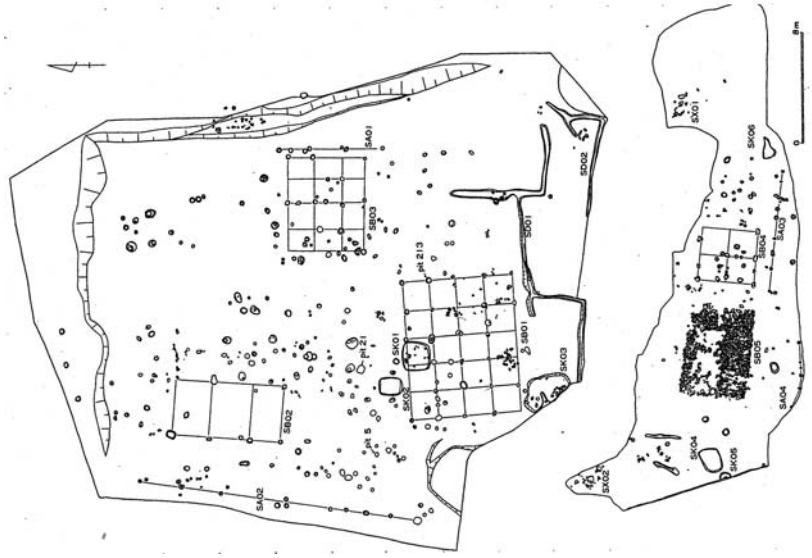
例えば，愛知県の岩崎城や奈良県の西宮城では，発掘調査で箱堀が検出されたのですが，箱堀の真ん中で薬研堀の一番底の部分のＶ字も検出されています。これによってＶ字の薬研堀を箱堀に変えていったというのが認められたわけです。つまり，薬研から箱堀に戦国時代の城は変化していくというのが考古学的に明らかになったということです。

それから，もう一つこの堀で注目できるのは，第４図上をご覧ください。これは，今日午前中に見ていただいた牛の皮城とほぼ同じような畝状竪堀群です。図は，京都府の平山城という城の畝状竪堀群です。詳しく見ていただきますと，14番と書いている一番右の竪堀と１番と書いてある一番左の竪堀が一番長い。そしてその間に横堀を入れて，横堀との間に２番から７番までがやや短い。８番から13番までが横堀から落としているという，実はランダムにつくっているわけではなくて，非常に規格的なつくり方をしているというのが分かると思います。両端の竪堀を長くして，その間に横堀を入れるのと入れないものを設けているということです。

こういう畝状竪堀群というものが，全国で出現します。北は青森県から南は大体福岡，熊本までぐらいでしょうか。ほぼ列島全域に発展していきます。



ところが，逆にこの畝状竪堀群というのは，発見されたときに「本当なのか。こんなものがあるんだろうか」ということで，新潟で初めて報告されたときに私も見に行ったのですが，もうそれは圧巻でした。



第４図〔上〕　平山城跡畝状竪堀群平面図
〔下〕　平山城跡第一郭・第二郭検出遺構図

ただ，これは城郭研究泣かせなんですね。一本ずつ降りていかなあかんので，降りていくとまたあがって，次また調べなあかんということで，大変な労力を使わされるわけです。当初，これは非常に特殊な防御施設だろうというふうに思っていたわけですが，その後，全国で分布調査が都道府県ごとに行われるようになってくると，先ほど言いましたように青森県から熊本県ぐらいまであるというのが分かったわけです。

これは戦国期後半では特殊な防御施設ではないということが分かりました。逆に，ないところの方が特殊だということも分かってきたわけです。ない地域があります。

それはどこかというと関東です。戦国大名後北条氏の領国エリアでは，この畝状竪堀群をほとんど採用しないということです。

後北条氏の場合は，横堀をつくって横堀の中に畝を設けます。つまり横堀の中を移動させないように，塞き止める畝をつくるわけです。それを畝堀と呼んでいます。平山城ですとか，牛の皮城のものは畝状竪堀群と呼んでいますが，後北条氏のものは横堀の中に畝を入れるので畝堀と呼んでいます。

あるいは，その畝堀が発達しますと障子の桟のように横堀の中に十文字の畝を設けるわけです。それを堀障子と呼んでいます。どうも後北条氏は，山城に畝状竪堀群を設けるのではなくて，横堀をめぐらせて，その横堀の中の移動を封鎖するような障壁を開発していくようなんですね。

それから，もう一つ堀で注目したいのは，堀の底の高さが違う事例というのがたくさんあります。例えば，三重県の力尾城ですとか，大阪府の烏帽子形城というのは，これは調査しているときも別に何ら不思議でないように調査されていたのですが，横堀の堀底が段になっているんです。横堀の中を移動する敵は一気に駆け抜けるわけですが，そこで２ｍぐらいの段があったら落ちるわけですね。あるいは，落ちないまでも一旦止まって，ゆっくり降りなければならない。そのときに上から撃たれてしまうということで，堀底に段差をつけることによって，堀内移動を封鎖しているというような施設も数多く検出されています。

堀底に単に段があるということではなくて，軍事的な意味を持っているというふうに考えなければいけないと思っています。

南九州の鹿児島県のあたりでは，シラス台地を延々と掘り込んで城をつくっています。これは群郭式と呼ばれる構造で，郭が島状に点在するような城のつくり方ですが，例えば知覧城では，発掘調査をしますと郭と郭の間の堀切が，現在の郭の天端から堀底まで26ｍ，しかも群郭式ですから堀底にいきますと，両側の郭から撃たれるわけです。撃たれるというより石を落されるわけです。その郭の数が，例えば志布志城では

20から30ぐらいあるわけです。その中の堀切に入っていきますと，もう迷路です。城というのは，守る側は自分の城ですから構造を把握しているわけですが，攻める側は初めて攻めるわけですから，これは迷路に近いわけです。

志布志城については，私自身個人的な体験ですけれども，実は女房と見に行ったのですが，「車の中で待っているから，あなた一人で見て来て」と言われて，１時間だけ時間をもらって走り回ったわけです。堀底を走り回ったら，本当に道が分からなくなってしまいました。これは今，上から撃たれると終わりやなという実体験をしたわけですが，まさに南九州のシラス台地を切り込んだ城というのは迷路として深い堀を持って敵を防ぐという構造が発達していくわけです。

ですから，堀といいましても様々な機能を持って，発達していくわけです。そういうものが，まず戦う城の一つの大きな防御施設として，私は評価すべきだろうと思っています。

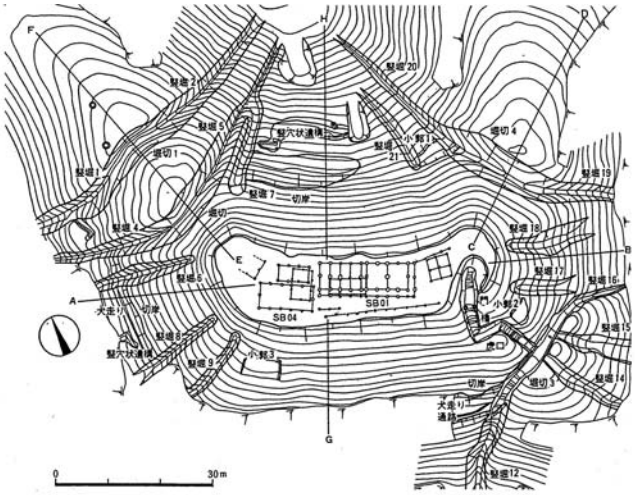
それから，もう一つは虎口です。虎口というのは，城の出入口ですね。戦国時代の城で最も変化が激しいといいますか，城は入られたらおしまいですから，いかに入らせないようにするか，これを工夫していくわけです。14世紀から17世紀初頭までの約300年間の戦国時代の城で考え出されていく虎口の変化というものに注目すべきものがたくさんあるわけです。

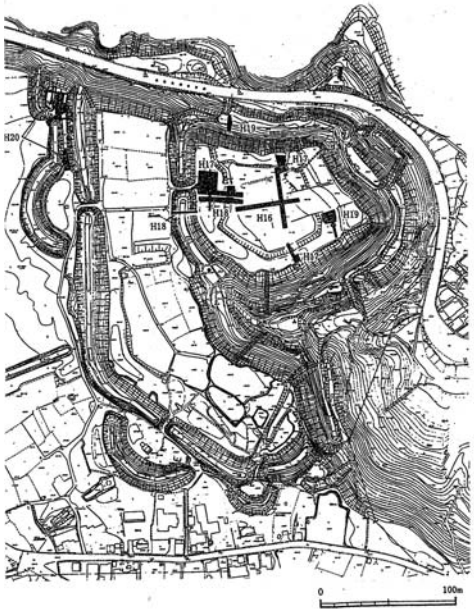
これは発掘調査をしなくても枡形になっているとか，あるいは喰い違いの虎口であるとかというのは分かるわけですが，やはり虎口というのは門と併用することによって，その防御機能というのは高まるわけですね。つまり門がどこについていたかという点は，発掘調査をしないと分からないわけです。地表面で確認することはできないわけです。

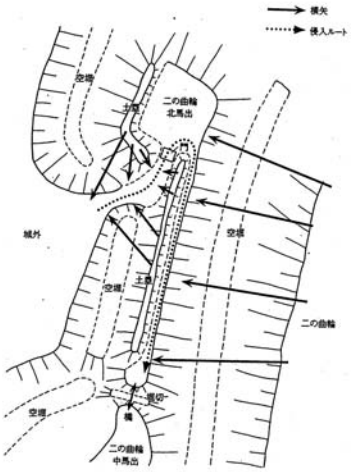
そこで，幾つか発掘調査で明らかになった虎口の空間があります。少し見ていただきたいと思います。第５図上をご覧ください。

御飯ノ山城という，これは福岡市にある山城ですが，これはすごい山城なんですね。

竪堀を幾つか設けているわけですが，この山頂部分の郭の一番右端に「門」と書いているところがあります。これは虎口の入口です。注目できるのは「門」と書いてある下に「櫓」と書いてあるんですね。これは柱穴が，実は6か所出てきてるんです。恐らく門の前に櫓をつくることによって，まず櫓を突破して門に入ることができるということです。それからおもしろいのは，その櫓を出ると「虎口」と書いているところがありますが，直角に折れ曲がっているわけです。これは城道なんですけれども，道を直角に折り曲げることよって直進を妨げているわけです。こういう虎口の形態が分かっています。







第５図〔上〕　御飯ノ山城跡遺構配置図
〔左下〕　諏訪原城跡測量図
〔右下〕　諏訪原城跡二の曲輪北馬出模式図

あるいは諏訪原城，これは今も発掘調査をずっとやっている最中なんですけれども，丸馬出というのがあります。第５図左下を見ていただきますと，外堀に対して半円形に土橋の前につくられた郭を丸馬出と呼んでいます。武田氏が得意とする虎口の前の防御施設ですけれども，この諏訪原城では発掘調査の結果，二枚の遺構面が出ていま

して，今までずっと武田氏だといわれていたのですが，どうも現在残されている丸馬出は，武田氏の後に入った徳川家康によって天正４年（1576）から７年（1579）ぐらいにつくり直されたものであるということが分かってまいりました。

つまり，地表面に残された遺構の観察によって城の構造を把握するという縄張り調査を城館研究ではやるわけですが，これまでの城郭研究者の大半は，この諏訪原城は武田信玄の典型的な城づくりだということで評価をしていたわけですが，発掘調査によってどうもそれが今ゆらぎつつあります。その後入った徳川氏によって改修されたということですね。

この丸馬出が今，発掘調査されているのですが，第５図左下の一番左上の方にＨ20と書いてあるところがあります。これは，平成20年度に調査されたところです。Ｈ20と書いてあって，線が二本出ていますが，その出ている上の方のところの馬出が第５図右下になります。この図が平成20年の調査の状況を示しているわけですが，北馬出の前に門が検出されています。この門に行くために矢印がいっぱい書いてありますが，これは大体鉄砲が撃てる横矢の部分で，横から鉄砲が撃てるところです。この門に入ろうとすると「城外」と書いてある左側から，様々な方角から鉄砲にさらされることになるというのが分かっていただけると思います。

この虎口空間というのが，いかに防御を高めるかというのが，門の位置であるとか，あるいは土塁の位置から分かってくるわけです。

その最も顕著な事例として，この諏訪原城があるんだろうと思うわけです。

さて，もう一つ今度は住む城として山の上の居住空間を考えたいわけです。山城といいますのは，今までよく言われてきたのは，戦をするための詰めの城である。普段山の上には住まない。山の下に館がある。これは戦国時代の城の二元的構造です。普段は根小屋という館に住んでいて，戦のときだけ山上の山城に立て籠るということがずっと言われてきましたが，例えば先ほど申し上げました小谷城では，山の上から巨大な礎石建物が検出されて37,000点の遺物が出土しています。

戦国時代後半になると，戦国大名，あるいは戦国大名に匹敵する巨大な国人クラスは，山の上にも住む空間を持つようです。

同じ滋賀県の事例ですが，守護六角氏の観音寺城では，山の上で見事な礎石建物が検出されています。あるいは，播磨の守護赤松氏の置塩城でも山の上に居住空間を持っていました。

皆さん，一乗谷の朝倉氏館というのは御存知だと思います。行かれた方もお見えだと思います。あれは麓の館ですね。あの後ろに山城があるのは御存じでしょうか。あるいは登られた方はおられますでしょうか。恐らく年間10万人の観光客が館を見に行かれて，99,900人は館だけで帰られると思います。100人も行かないかもしれないですが，後ろに見事な山城があるんですよ。一乗谷では残念ながら，あれだけ麓の館や城下町を発掘しながら，山城の方は発掘してないんです。しかし，山の上にいきますと，見事な方形区画の郭があって，恐らく居住空間が上にも，あったんだろうということが想定できます。戦国期後半にはそういうぐあいに，住む山城というのがあったというのが，今明らかになりつつあります。単純に麓に住んで，上は住まないということではなさそうだということが，近年山城の調査で明らかになってきています。

さて，そういった住む城の中で最も注目できる一つの遺構として，竪穴があります。竪穴というと，縄文時代や弥生時代，あるいは古墳時代の竪穴住居を連想されると思うのですが，全く同じものが中世の城からも出てまいります。

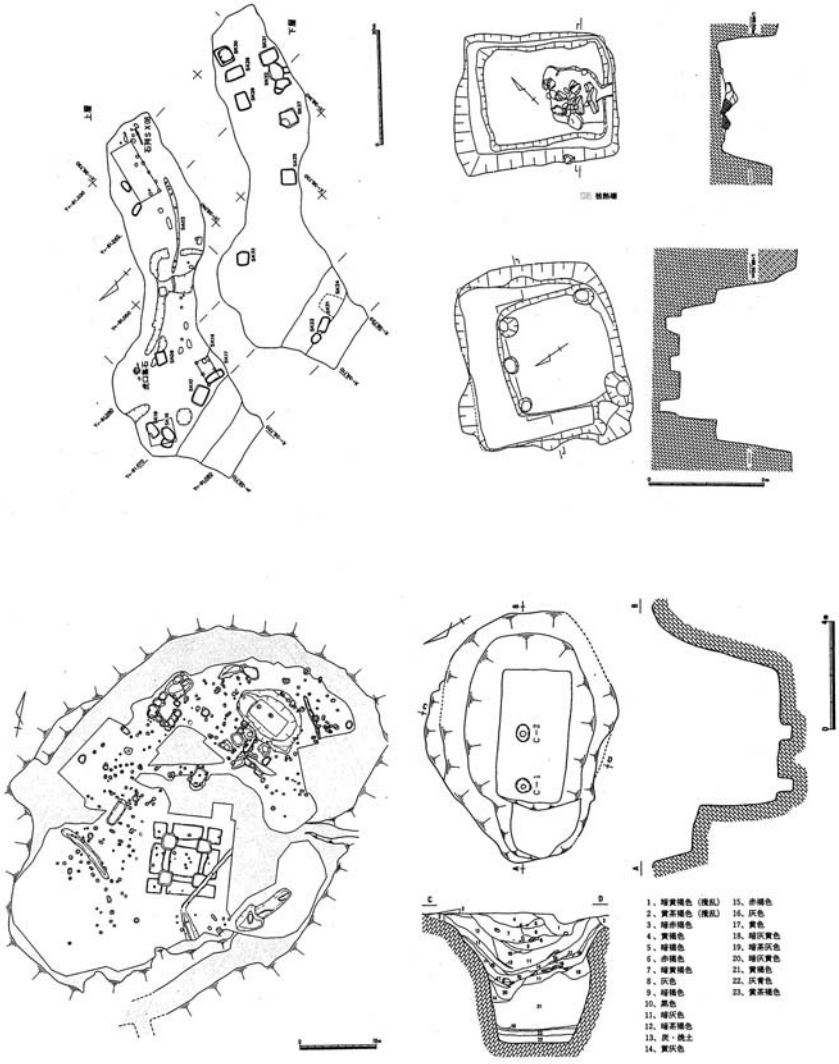
例えば，長野県佐久市にあります金井城では，城から603棟もの竪穴が検出されています。そのうち，柱穴を持つものが52棟，持たないものが551棟あります。柱穴を持たない竪穴が圧倒的に多いわけです。

これは私は軍隊が移動するときに，この金井城は武田軍が使ったというふうに言われていますから，武田軍が移動するときに，足軽雑兵が住まいしたベースキャンプ，もしくは敵が来たときに周辺の村人が逃げ込んだときに使った竪穴ではないかと思っています。

お城というのは，戦国時代には城主だけの城ではなくて緊急避難場所としても利用されます。村人たちが逃げ込める城なんです。これは近世では絶対に考えられないわけです。近世大名の城に村人が逃げるというのはあり得ないわけですが，戦国時代は村人の緊急避難場所になるわけです。そういうときにつくった竪穴の可能性があります。

あるいは，第６図上をご覧ください。

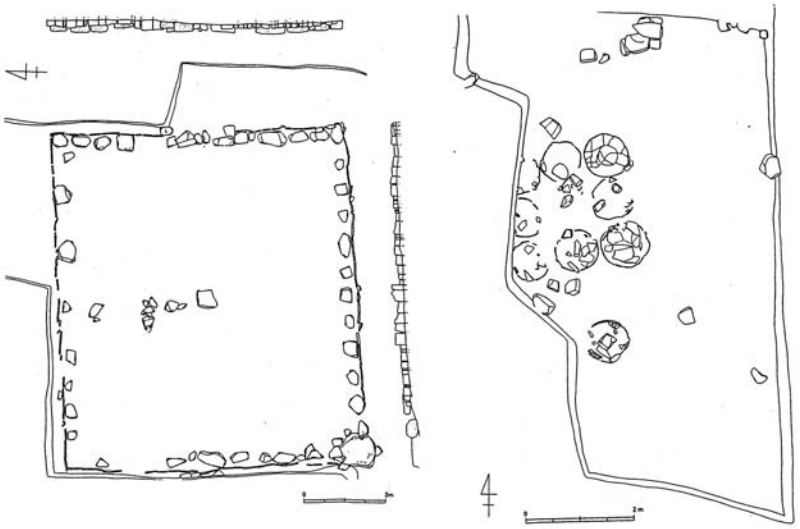
これは京都府のシミズ谷城という城ですけれども，鍛冶，つまり製鉄をするようなものが竪穴の中から出てきています。どうも，武具を修理したり，簡単な鍛冶は城の中でやっていたようです。これは，主要な戦国期の遺構の一つです。こうした鍛冶が本丸の中から検出されます。江戸時代の城の本丸では考えられません。このように鍛冶をしていたというのが，戦国時代のお城で往々にしてあるわけです。簡単な武具，武器を鋳直したりしていたんでしょうね。そういうものがシミズ谷城をはじめ多くの山城から検出されています。

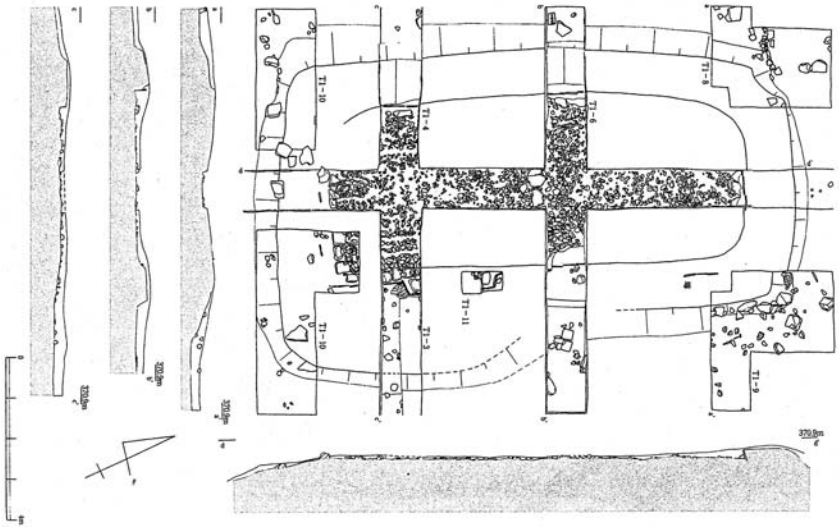


第６図〔左上〕　シミズ谷城跡検出遺構平面図
〔右上〕　シミズ谷城跡鍛冶炉（上），竪穴（下）平・断面図
〔左下〕　周匝茶臼山城跡遺構全体図
〔右下〕　周匝茶臼山城跡大型竪穴遺構平・断面図

あるいは第６図下は岡山県の周匝茶臼山城で，左下は本丸の全体図ですが，その本丸の右斜め上ぐらいに巨大な竪穴が検出されています。長さが９ｍ，幅が７ｍ，深さは検出面から4.5ｍ，右下がその竪穴だけの平面図ですが，竪穴の底には二本の柱穴が穿たれて，上に大きな屋根が葺かれていたのではないでしょうか。おそらく半地下式の倉庫のようなものではないかと考えられる巨大な竪穴が検出されています。

さて，倉庫のようなものといいますと，倉庫自体も実はたくさん検出されています。一番注目されるのは，第７図をご覧ください。これは塼と呼ばれる瓦で焼いたタイルですね。禅宗のお寺へ行くと，お堂の床に，長さが30㎝ぐらいの四角い平たい瓦が張ってあると思います。それを塼と言います。その磚を立てて，第７図左上は兵庫県の相生市にあります感状山城の塼列建物ですね。塼を立てて，その内側に礎石を置いています。これは，城以外では，例えば大阪の堺の都市遺跡でたくさん検出されています。いわゆる土蔵と思ってください。その土蔵の痕跡が感状山





第７図〔左上〕　感状山城跡Ⅲ曲輪土蔵（塼列建物）平面図
〔右上〕　感状山城跡Ⅲ曲輪埋甕遺構平面図
〔下〕　置塩城跡第Ⅰ－１郭塼列建物平・断面図

で検出されています。

あるいは，第７図下は播磨守護赤松氏の置塩城ですが，同じように塼が張られている蔵の遺構です。

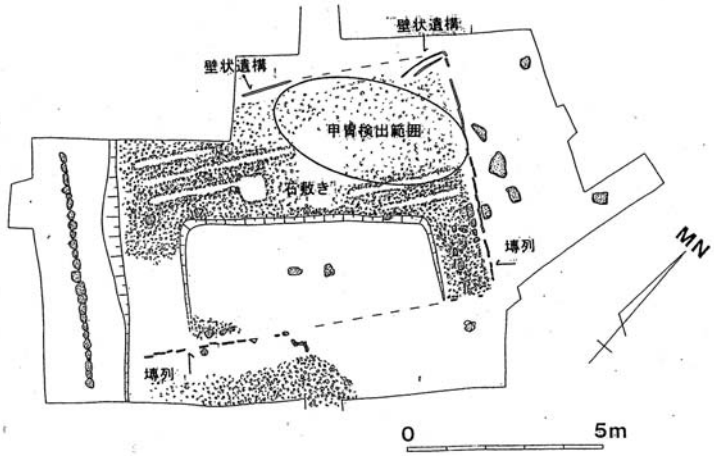
つまり都市遺跡の蔵のようなものが山城の上にもあったというのが，近年の調査で分かってきたわけです。

また，河内守護所であった高屋城からも塼貼りの土蔵が検出されています。

あるいは，この土蔵には一体どんなものが納められていたのでしょうか。

第８図を見てください。

これは神戸市にある端谷城というお城です。第８図上は端谷城の全景です。1,000分の１の地形測量図ですけれども，おおよそ大きさは分かっていただけると思いますが，小規模な山城です。その一番上の方が本丸になるわけですが，本丸の左端に櫓台のような土段があって，その一段下に塼列建物が検出されていま



第８図〔上〕　端谷城跡調査区位置図
〔下〕　端谷城跡塼列建物平面図

す。その塼列建物をアップしたものが第８図下になります。塼が貼り巡らされて，中は石敷きになっています。注目できるのは，そこに甲冑検出範囲と書いているところがあります。実は，ここに腹巻に相当する甲冑が６領から７領納められていました。つまり，武具庫だったことが分かりました。

あるいは，大津市の関津城では土蔵の中から炭化した穀物がたくさん出てまいりました。どうも米蔵だったようです。

この関津城では二つの土蔵が見つかっておりまして，もう一つの土蔵からは，屏風の金具や蝋燭を立てる燭台が出土しておりまして，一つが米蔵で，一つは道具蔵であったというふうに，それぞれ内部に納めるものも機能分化していたことが判明しました。山城や平城にはそういう住むための蔵というものもたくさん建てられていたようです。

もう一つおもしろいのは，少し戻っていただきますと，第４図下をご覧ください。

これは畝状竪堀群が検出された平山城の第１郭，第２郭の検出遺構図ですが，第２郭を見てください。第２郭というのは右側です。やや高まっているところにＳＢ05という礫が敷かれた礎石建物が出ています。この礫敷というのは，広島県の薬師城でも，こうした礫敷の礎石建物が出ていたと思いますが，この平山城では，ものすごい火を受けた痕跡が，この礫敷からだけ見つかっています。ほかの建物は全然焼けてなくて，ここだけ焼けているんです。

それからもう一つ戻っていただきますと，第１図上の広島の恵下城ですが，主郭から３棟の建物が出たと言いましたが，その一番右端，つまり郭の一番端っこで２間×２間の礎石建物が出ています。どうも，郭端部の礎石建物だとか，あるいは平山城もそうなんですが，礫敷の礎石建物というのは，土間ではなくて礫を敷いたりするということを考えると水を嫌うもの，私は火薬なんかを納めていた火薬庫ではなかったかと考えています。それは，爆発すると中心部にあるとまずいので郭の端部に置いていたのではないでしょうか。そうした可能性を考えてもいいのかなと思っています。

また，兵庫県の三木城や感状山城では，埋めた備前焼の大甕が検出されています。三木城では16個，感状山城では９個の甕が埋められています。いわゆる埋甕遺構というものですね。第７図右上をご覧ください。これは感状山城の９個の埋甕の出土状態です。備前焼の甕が９個埋められた状態で出ているわけですね。これで何をしたのでしょうか。今までいろいろな説がありました。お酒を入れていた。それから油を入れていた。染物をしていた等々です。

ところが，この感状山城ではたまたま甕の中に残っていた残存脂肪を分析した結果，うそのような話ですが，塩漬けの猪肉を貯蔵していた可能性が非常に高いというデータが得られました。

第７図左上の土蔵のすぐ横で埋甕が出ていますので，土蔵には何らかの武具とか，そういうものを入れていて，すぐその横に籠城戦のための塩漬けした肉を入れていた埋甕がある。これらが同じ郭から検出されたわけです。

つまり感状山城では，そういう生活をするためだけの貯蔵用の蔵や埋甕を置いた郭があったということです。そういうことも分かってきました。

一方，三木城では炭化した麦の粒が出ています。つまり穀物を入れていた埋甕です。

このように，実は蔵にも様々な用途があって，それぞれが城の中で機能していたようです。城に住むためにそうした蔵も建てられていたということが分かってきたわけです。

後はスライドを見てもらいますので，発掘調査されたお城のまとめとしましては，実は戦国時代の山城の発掘調査というのは，残念ながら学問的欲求から始まったわけでは決してなくて，昭和40年代以降の高度経済成長に伴う開発行為に対して止むを得ず行われたことというのは否定できない事実です。

当時，城館遺跡はおろか戦国時代の考古学を研究する研究者もほとんどおらず，ただ調査のみが先行して行われてきたわけです。近年ようやく戦国時代の城館遺跡を考古学から研究する研究者も増え，これまでの調査成果の蓄積が分析されるようになっ

てまいりました。

城館研究は古くより独立して行われてきました。要するにお城の研究というのはすごく好きな人たちがいて，その研究方法は地表面に残された城郭構造を図化して，築城年代や築城主体を分析する，いわゆる縄張り研究と呼ばれるものでした。

縄張り研究は，これはすごく重要な調査・研究なんですね。発掘されていない城館遺跡でも大体その年代や築城主体が想定できるわけです。どちらかというと，医者で言えば問診に当たるのでしょうね。

しかし，普請という土木事業を知る手がかりにはなるのですが，建築，つまりどんなものが建っていたか，あるいはどんなものが使われていたかという作事面や，遺物面からは全く手が出せなかったわけなんです。それが，発掘調査が実施されることによって，遺構，遺物の両面から様々なことが分かってきたということです。

城は研究すればするほど，冒頭で申し上げましたように，戦争に使うためにつくったんだけども，実際に戦争することはほとんどなかった。あるいは，戦いが終わった後も焼かれることはほとんどなかったというのも発掘調査で分かってきた事実です。

こんなおもしろい事実もあります。お城というのは「軍事的要衝に築かれた」と大概説明されているわけです。交通の要衝であるとかね。日本には約３万から４万の城が築かれています。３万から４万もの軍事的要衝な場所があったのでしょうか。私は決して城は軍事的要衝のところだけにつくられるのではないと思っています。

村の領主たちが，村人から領主として認められるための装置としてつくらざるを得なかった城もあったのだろうと思っています。

あるいは，愛知県の瀬戸市で近年発掘された桑下城では，城が存続していたほぼ同じ時期に，堀切を隔てた隣の尾根で，窯が操業されています。それは桑下東窯という窯なんですけれども，いわゆる瀬戸焼を焼いていた窯です。どうも桑下城はその窯業生産を掌握するために築かれた城のようで，領主は決して農業だけではなくて，様々な生業を押さえるためにも城はつくられたのではないのでしょうか。中世の城館は規

模，構造，機能が千差万別です。それらを解き明かすというのが考古学に求められることではないだろうかと思っています。

今日は，城館遺跡より検出された遺構を話の中心に置きましたけれども，出土した遺物からも，そういった城の機能の違いであるとか，年代の違いというのも導き出せるのも事実です。またそれについては改めて述べたいなというふうに思いますが，最後に少しだけ発掘された城跡の写真を見ていただきたいと思います。

これは大津市の関津城というお城なんですね【スライド１】。個人的な話ですが，この関津城は私の住んでいる家から車で２，３分のところなんです。毎日のように見に行けて大変楽しかったですけど，よく話をしに行って担当者には大変ご迷惑をかけたと思います。これが蔵です。おもしろいでしょ。小さな郭で，この蔵だけをつくっている。

これは切岸です【スライド２】。

この上に本丸があります。これが全景です。これが本丸，これは土塁です。ちょっと下がったところに蔵が一つ，また山の裾には館があって，そこにも蔵が出ているわけですが，まず驚くのが，全面を発掘してくださったので切岸の状態がよく分かります。これを登れと言われても，やっぱり登れないです。人工的に斜面をカットしています。そして最後によりきついカットを施して土塁をつくり出しています。そういう城なんです

【スライド１】関津城跡

【スライド２】関津城跡

ね。ちなみに，城としてはこれだけなんです。右端に堀切があります。つまり，丘陵の先端部，規模で言いますと，恐らく25ｍぐらいの城です。このホールよりも，本丸は小さいです。それだけの城なんです。

これは蔵です【スライド３】。蔵にはちゃんと扉があり，その入口だけ石を敷いています。恐らくここに土の戸があって，片側に開いたんだろうと思います。中が焼けています。中だけ焼けているんですよ。外は焼けてないです。中から炭化した米殻が大量に出てきています。つまり，ここでは戦があって，攻めた側は米を焼くためにわざわざ蔵を開けて中だけに火を放ったようです。

これは本丸の全景です【スライド４】。これだけの大きさです。本丸からも礎石が出てるので，建物が郭全域に建っていたんだろうと考えられています。非常にコンパクトですが，丘陵上が詰城です。礎石の建物はあるけど，本丸からは遺物が出ない。中腹に米蔵がある。麓には館があって，そこには屏風の金具や燭台が入っていた道具蔵があるという構造のお城です。

【スライド３】関津城跡

これは本丸の土塁の構造です【スライド５】。盛土ではなくて，削り残した土塁だというのが断面から分かります。そして土塁の縁辺部にまで礎石をめぐらせています。これはひょっとすると，縁のあった建物だったのかもしれません。この幅ですから縁をめぐらせていた束柱の礎石の可能性もあります。

【スライド４】関津城跡

次は，諏訪原城の発掘調査状況ですが，馬出の部分でちょうどお二人が柱を持たれているところが門の礎石です【スライド６】。馬出でちゃんと門が出てきたということです。そして直進させず折曲させて城の中に入れさせるということになります。

【スライド５】関津城跡

これは門跡の礎石です【スライド７】。

【スライド６】諏訪原城跡

それから，もう一つ，これは本文で紹介できなかったのですが，京都府の一番南の木津川を越えたところに位置する鹿背山城です。ここ５年間ほど毎年，範囲確認の発掘調査を実施しています。これは堀切を発掘したところです【スライド８】。これは今までの地表面です。これが今まで堀底だと思っていたところです。ちょっとＵの字状になっていますが，それを発掘しますと，ここできれいに段が一段ついて，底がこの下なんです。要するに，堀底は幅が狭く動けないようになっています。互い違いにしか足が動かせないわけです。

【スライド７】諏訪原城跡

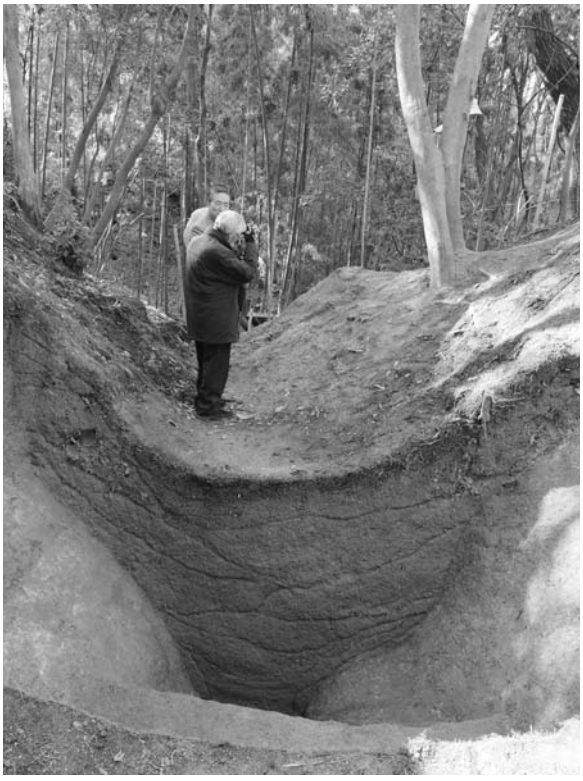
これはちょうど郭と郭の間の堀切で，人物の立っているところが今まで堀底だと言われていたところで，実際の堀底は，さらに２ｍ半ほど深くなっているところで検出

されました【スライド９】。このぐらいの高さで私は今，直上の郭から人物を見てるわけですが，石を落とせば堀底を登ってくる敵を防ぐことができることが分かっていただけると思います。これもそうです【スライド10】。今は歩けますけれども，ここで段がついて，この下へ敵が入ってしまうと，もう上がれない，歩けないという状況がよく分かると思います。

【スライド８】鹿背山城跡

ですから，今各地に残されている堀切というのは，さっきも言いましたように縄張り上，ここは堀切だというのは分かるわけですが，さらに発掘をすれば，その堀切というのが，どれだけ急斜面になって堀底で動けないかというのが明らかにできるわけです。ですから，今の堀が決して当時の堀底ではないということです。もっともっと

【スライド９】鹿背山城跡



【スライド10】鹿背山城跡

深くて，急峻なものであるというのが発掘調査で分かるわけです。

ということで，持ってきたスライドを見ていただきましたけれども，まさに発掘をすれば，今まで全く思いもしなかった城の実態というのがよみがえってまいります。その際たることが，今までお城というのは，有名な武将とか有名な城主とイコールになっておりますけれども，決してそうではなくて，今のお城というのはその後につくり直されたものの可能性が高いとかということが，発掘調査で分かってくるわけです。ですから，城の存続した実年代がよく分かります。

これは，なかなか縄張りでは分からなかったことなのですが，発掘調査で，城が本当に機能していた年代が分かるということです。そうした事実が，発掘調査によって，日本中で明らかになってきています。戦国時代を考える上で，城館遺跡は，日本に３万から４万もあるわけですから，それらを分析することによって日本の中世社会がより明らかになるのではないかというふうに思っています。

非常に雑駁で早口で申しわけなかったのですが，与えられた時間がまいりましたので，私の話はこれで終わりたいと思います。

どうも御静聴，ありがとうございました。

出典一覧

第１図（上）：広島県教育委員会『恵下城跡発掘調査概報』1978年　の図より作成。
（下）：東員町教育委員会『山田城跡発掘調査報告書』1984年　の図より作成。
第２図：横手市教育委員会『大鳥井山遺跡－第９次・第10次・第11次調査－』2009年　の図より作成。
第３図：兵庫県教育委員会『吉田住吉山遺跡群』2011年　の図より作成。
第４図：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書第14冊　平山城跡・平山東城跡』1990年　の図より作成。
第５図（上）：福岡市教育委員会『香椎Ｂ遺跡』2000年　の図より作成。
（下）：島田市教育委員会『史跡諏訪原城跡－平成16年度～平成20年度発掘調査概略報告書－』2010年　の図より作成。
第６図（上）：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「シミズ谷城跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第62号　1996年　の図より作成。

（下）：吉井町教育委員会『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書』1990年　の図より作成。

第７図（上）：相生市教育委員会『感状山城跡発掘調査報告書』1989年　の図より作成。

（下）：夢前町教育委員会『播磨置塩城跡発掘調査報告書』2006年　の図より作成。

第８図：神戸市教育委員会『平成16年度端谷城跡埋蔵文化財発掘調査報告（第５次）』（現地説明会資料）2005年　の図より作成。

スライド１～11：発表者作成。